

## *The Battle of Life*

—自己犠牲の愛と家庭的雰囲気—

本 田 三 男

### *The Battle of Life*

— Mortgaged Love and Homeliness —

Mitsuo Honda

#### I

1840年代になると、Dickens は政治的発言を *Examiner* や *Morning Chronicle* の紙上に発表して、悲惨な40年代の社会矛盾に対する激しい怒りの捌け口を求めていた。*Examiner* の経営者 Sir John Easthope は Dickens の力を認め、これをさらに続け、出来る事なら weekly report を担当してもらいたいと提案した<sup>1)</sup>。

日刊紙の定期的投稿者の立場に少しの関心も持っていなかった Dickens は、当然この申し出を断ったが、この一件が彼の日刊紙を創刊したいと言う願望に火をつけた。友人 Forster は最初からこの企てに反対であった。Dickens の健康に悪影響を与えるに違いないと確信していたからだ。しかし Dickens は親友の心からの忠告を受け入れず、1845年11月27日パンチ誌に‘New Morning Paper を創刊する’と宣言した。新聞名は *Daily News* で、一部5ペンスの予定とまで公表した。完璧を追求する Dickens の集中力と熱意、さらに錚々たるスタッフの努力で、*Daily News* は1846年1月21日に発刊された。

Forster の予感的中した。この年の3月になると、早くも Dickens の情熱は急激に冷めて行く。いつの時代も魑魅魍魎の徘徊する政界に係わるニュースを日々刊行する作業は、彼の手には負えないし、面白くもないと分かったからだ。作家が殆ど果てしのない熱情を注ぎ込んだ新企画の挫折は、彼の精神と肉体に言い知れぬダメージを与える。この直後 Dickens は彼の愛して止まぬ London で小説を書く気持ちにはなれなくなってしまった。

Christmas Book の4作目となる *The Battle of Life* が書かれたのは、正にこのような状況の下であった。*Daily News* 失敗の痛手からなお回復していない精神状態で、その上さらに大作 *Dombey and Son* を同時に書き始めようとした<sup>2)</sup>作家 Dickens の姿勢の中に、読者は一種の自虐的態度さえ感じる。おそらく Dickens は自分の限界を越え、疲れ切った精神と肉体に鞭打って、ぐらついている自己存在に対する自信を、必死で足掻きながら、取り戻そうとしていたのではなからうか。

天才 Dickens の能力と情熱を総動員してもなお不可能な事がある。それは当然な事で、Forster もそれを感じ見抜いていたから彼を思い止ませようとしたのだ。考えられる最悪の形でその事実を思い知らされた Dickens の自信喪失を癒してくれる唯一のものは、新たな情熱の対象を発見する事と、気分転換をはかる事だけであった。*Dombey* への挑戦は明らかに前者に当てはまると言えるだろう。だが *The Battle of Life* の場合は情熱と言うよりも義務感の産物、

もっと言えば惰性の産物と言えなくもない。*Carol* 以後書き続けて来た Christmas Tale の季節が又近づいていたからだ。

旧年来の友人達の心配り、スイスへの家族旅行で得た新たな友人達との交友<sup>3)</sup>。何よりも大自然の懐に抱かれて過ごす日々が、あの忌まわしい敗北感を覆い隠してくれた。殺人的とも思われる創作活動に敢えて身を投じることにより、逆に *Daily News* 失敗以前の自分自身を取り戻す事が出来る。十二分に打ちのめされてはいたが、Dickens にはまだそう考えるだけの軌道修正機能が残されていた。

1843年に発表され好評を博し、一躍 Dickens を‘クリスマスのおじさん’にした *Carol* のテーマは堅くて冷たい殻に閉じこもった老人の心が溶けて行き、人間としての温かみを取り戻すその過程にあった。*Chimes* では人間の善意や個人個人の努力ではどうにも救いようの無い暗く厳しく重い社会の矛盾が執拗に描かれ、作者の強烈な怒りだけが際立っていた。続いて45年、つまり Dickens が *Daily News* 創刊の希望に燃え、その実現に全力を傾けていた時期に発表された *Cricket* では、平凡でごく平和な家庭にも、本来善良で幸福な妻の一瞬の‘想い’、又は‘憧れ’から、深刻極まりない悲劇が起こり得る姿が示された。その意味でこれら三つの Christmas Tales は、それぞれに異なったテーマが異なった妖精に導かれて展開されていた。

だがすでに述べたように、極度に消耗した精神状態の下で、書かなければならないから書かれた1847年の Christmas Tale は、多くの点で、前年の *Cricket* の影を引きずっているように思われる。このシリーズとしては初めて、妖精が登場せず、明確に‘A Love Story’と副題の付けられたこの物語だけが前作の二部作とも思える印象を与えている理由。その最大の理由は、この作品が書かれた年が彼にとってはある意味で再起の年であり、作者の心に *The Battle of Life* 以上の意味を持つ作品 *Dombey* が存在し続けていたと言う巡り合わせにあったと言えよう。

とは言え Dickens は創作にあたって、どんな小品であっても、手を抜くことを考えるような作家ではなかった。少なくとも執筆中はその作品に全精力を注いで書いた。それでもやはりこの作品が *Hard Times* 同様、Dickens らしい躍動感の感じ取れない、余りに観念的な作品にしあがっている印象は拭い去れない。僅かに Britain と Clemency の描写の中に、いつもの Dickens を彷彿とさせる諧謔と機知が読み取れはするが、それも今一步表面的でもの足りなく消化不良の感じが残る。

そこで本論では、*The Battle of Life* の中に窺える *Cricket* との類似性に注目しながら、Dickens が大上段に身構えて観念的に教育や愛といった大きなテーマを描こうとした時どのような作品が出来上がるのか、確かに巡り合わせの点から考えて見れば、精神的にも時間的にも不運が重なった年ではあったが、それでも読者を裏切る事の無かった Dickens の魅力は何処に発揮されているのか等について考えて見たい。

## II

Dickens に取って創作活動の源は何よりも London の通りを散歩する事であった。夜な夜な見慣れた街角をただ歩き回ることによって精神と肉体の健康は維持され、創作への意欲とイメージが沸き上がってくるのだった。44年10月8日 *Chimes* の構想を Genoa で得た時も<sup>4)</sup> 彼は London の通りを懐かしんでいた。2年後同じく外国ではあるが今回は前とは状況が一変していた。London の裏町を徘徊する事の重要性を誰よりも認識している彼が、‘he could not commence the book in London, because he feared the newspaper business just relinquished, would still be too much in mind to permit him to formulate his ideas.’<sup>5)</sup> と考えたからである。一つには挫折した自

分に対する London の人々の視線を逃れ、一つには気分転換の必要に駆られ Dickens は今スイスにいた。

彼が夏の数カ月を過ごす為借りた villa は Lausanne 近郊の Rosemont と呼ばれるレマン湖畔にある二階建ての別荘であった。正に大自然の中において、アルプスの山並みを眺め、この地で知り合った人々<sup>6)</sup>との会話からこの物語の舞台やストーリーのヒントを得て作品が書かれて行ったと考えられるが、それでも常に彼は心の奥底で London の町並みや通りを懐かしんでいる。そこには複雑で集中出来ない Dickens の姿が見え隠れする。London では idea が浮かんで来ないと考えてスイスに逃れてきたにもかかわらず、London 無しでは idea に命が吹き込まれない。この完全な手詰まり状態、閉塞状況の中で、世界の何処よりも美しい自然を舞台に自己犠牲的 love story を展開させる矛盾。この作品には初めから作家自身の自己矛盾が内包されている。我々読者はいま一つ迫力に欠ける第4作目の Christmas Tale に進む前に、先ずこの点を押さえておかなければならないだろう。

作品は登場人物による‘人生の戦い’に先立って人間による過去の戦場の描写で始まる。今でこそ青々と草木が茂り、花が咲き乱れ、小鳥の囀る長閑な原野も、かつては血で血を洗う残酷な戦闘の舞台であった。平和で穏やかな原野の至る所に、かつての血生臭い戦いの傷痕が残されている。時の流れと自然の営みがそれらの全てを自然の懐に取り込んで、人々の記憶の底深くに残忍で愚かではずべき行為の痕跡を封じ込める。過去の邪悪な狂気によってもたらされた不幸と現在の平穏。Dickens の風景描写は少しばかりの感傷を伴って、あくまでも穏やかに静かに進行する。

この冒頭部分を読んだ時読者の頭に *Cricket* の最後の場面が蘇る<sup>7)</sup>。May と Edward, Dot と Carrier, Tackleton と Mrs. Fielding, Caleb と Tilly Slowboy。何とも奇妙で儂さの漂うダンスの後の突然の静寂。動から静への余りにも急激な変化。後に残された物は壊れた子どもの玩具の一つ。まるで喜びも哀しみも人間の持つ全ての喜怒哀楽が跡形もなく消え去り、時間だけが何事も無かったかのように流れている。確かに *Cricket* はこおろぎの精の支配する夢物語であるから、この ending は不可解な印象を受けはするが不自然とは言えない。だが *The Battle of Life* は、作者自身が明言したように、Ghost や Goblin, 又 Fairy の登場しない‘人間’だけの物語だ。本来前3作とは異なる性格を持つ様に意図された筈の Christmas Tale の冒頭の描写が、時の流れを感傷的に語る静で始まっている。読者は先ず直観的に意識する。果たして単なる偶然の一致なのか。それとも Dickens の意図が隠されているのだろうか。

そこに突然 Grace と Marion 姉妹のダンスの場面が出現する。

; where, on a bright autumn morning, there were sounds of music and laughter, and where two girls danced merrily together on the grass, while some half-dozen peasant women standing on ladders, gathering the apples from the trees, stopped in their work to look down, and share their enjoyment. It was a pleasant, lively, natural scene; a beautiful day, a retired spot; and the two girls, quite unconstrained and careless, danced in the freedom and gaiety of their hearts.<sup>8)</sup> (p. 241)

*Cricket* の最後の場面とこの作品の冒頭部分の奇妙なトーンの重なりは強烈で、実際読者は *Cricket* で突然止まったぜんまい仕掛けの人形劇が一年を経て、何かの調子で、再び始まったのではないか言う錯覚にとらわれるほどだ。

姉妹のスペイン風のダンスで突如動き始めた物語に続いて登場するのは、二人の父 Dr. Anthony Jeddler で、作者は彼を‘a great philosopher’と位置づける。多分に皮肉の込められた

この言葉を文字どうり受け取る事は出来ない。Jeddler はこの世の出来事全て、人生そのものを一つの笑劇として捉えている。

Doctor Jeddler was, as I have said, a great philosopher, and the heart and mistery of his philosophy was, to look upon the world as a gigantic practical joke; as something too absurd to be considered seriously, by any rational man. His system of belief had been, in the beginning, part and parcel of the battleground on which he lived, as you shall presently understand. (p. 243)

人生を大いなる冗談とみなし、常に傍観者の態度を取り続ける Dr. Jeddler の人物設定は一、二章を通じて一貫している。平凡で現実的、時に物足りないと感じる程の描写が続く。娘二人に対する彼の愛情は随所に示されはするが、言葉や態度で大きな愛情や深い哀しみを示すことはない。最後の章、即ち第三章で Marion 失踪の真相を Jeddler は知っていた。第一章、第二章では何一つ分かっていなかったのに。彼は長女 Grace の Alfred に対する過去の想い、憧れの気持ちを知らながら、おそらく Alfred が選んだと思われる Marion との結婚を当然の事として受け止めている。もしかしたら、人生は大いなる冗談で深刻に考えるに値しないという彼の哲学は、二人の娘が一人の男性を恋慕している現実を目の前にした打つ手のない哀れな父親の最後の逃げ場として創り上げられたのかも知れない。彼は愛する娘達の立ち居振る舞いをただ眺める以外に方法は無かった。心の底では愛して止まない Alfred を妹 Marion に‘譲り’、ひたすら二人の幸福な結婚を祈っているように思える姉 Grace。そんな長女に対する配慮のかけらも Jeddler は示さない。その点で読者は彼に一種の苛立ちにも似た感情を覚える。娘達の心の中も読めず、又読もうともせず、人生をただ成り行き任せに眺めている Jeddler が、余りにも平和で呑気に思われるからだ。

その間にも Marion は姉であり母でもある Grace の本心を探ろうと苦闘している。実は姉が自分同様 Alfred を深く愛していると知ることは、彼女にとって絶望的な苦痛だ。自身 Alfred を心から愛してはいるが、彼女にとって見れば Grace の幸福こそが最優先される。今まで末っ子の Marion に実現出来ない事は一つ無かった。父も姉も Alfred も使用人も彼女を深く愛し、彼女の願いは全て叶えられた。今も又 Alfred との結婚の夢が叶えられようとしている。不足とは何か知らずに育ち周囲の愛情を当然の如く受け止めてきた彼女はしかし、‘spoiled child’ではなかった。何時ものように願いが叶えられようとしたその時、彼女は Grace を思った。笑顔と優しさと落ちつきの感じ取れる Grace の穏やかで平静な態度の奥底に封じ込められている情熱の火種を感知しようと努めた。

Dickens はその一連の展開を決して詳細に描こうとはしない。ただ強調されるのは、Grace の本心を読み取ろうとする Marion の視線、とりとめもない些細な会話の中に暗示される Grace の Alfred への思慕。それ以上に第三章で示される結末へ向けての Jeddler の予言的台詞だけだ。後はどの様に解釈しようとも読者の皆様、ご自由に。作者はまるで推理小説を展開させているかのような徹底した突き放しの態度と手法で物語を書き進めている。

‘Well! But how did you get the music?’ asked the Doctor. ‘Poultry-stealers,<sup>9)</sup> of course! Where did the minstrels come from?’

‘Alfred sent the music,’ said his daughter Grace, adjusting a few simple flowers in her sister’s hair, with which, in her admiration of that youthful beauty, she had herself adorned it half-an-hour before, and which the dancing had disarranged.

'Oh! Alfred sent the music, did he?' returned the Doctor.

'Yes. He met it coming out of the town as he was entering early. The men are travelling on foot, and rested there last night; and as it was Marion's birth-day and he thought it would please her, he sent them on, with a pencilled note to me, saying that if I thought so too, they had come to serenade her.'

'Ay, ay,' said the Doctor, carelessly, 'he always takes your opinion.'<sup>10)</sup>

'And my opinion being favourable,' said Grace, good humouredly; and pausing for a moment to admire the pretty head she decorated, with her own thrown back; 'and Marion being in high spirits, and beginning to dance, I joined her.' (p. 243)

Dickens は総じて Grace を描くとき感情を抑えた、人生の何かを悟った女性として語っている。しかし上記引用文に見られるように Dr. Jeddler が Alfred と彼女についてコメントする時、常に彼女はごく自然に控えめに喜びの感情を示す。更に重要な点は、その場に必ず Marion がいると言う設定にある。全く同じ設定の同様な意味を持つ例を挙げれば、例えば、Alfred が3年間大陸での医学の勉強を終え、再び英国に帰国する内容をしたためた手紙が届いた Jeddler 家で、Dr. Jeddler は安楽椅子に腰をおろし Alfred からの手紙を繰り返し繰り返し読み、静かに語りはじめる場面がある。

'Ah! The day was,' said the Doctor, looking at the fire, 'when you and he, Grace, used to trot about arm-in-arm, in his holiday time, like a couple of walking dolls. You remember?' 'I remember,' she answered, with her pleasant laugh, and plying her needle busily. 'This day month, indeed!' mused the Doctor, 'That hardly seems a twelvemonth ago. And where was my little Marion then!' 'Never far from her sister,' said Marion, cheerily, 'however little. Grace was everything to me, even when she was a young child herself.'

'True, Puss, true,' returned the Doctor. 'She was a staid little woman, was Grace, and a busy, quiet, pleasant body; bearing with our humours and anticipating our wishes, and always ready to forget her own, even in those times. I never knew you positive or obstinate, Grace, my darling, even then, on any subject but one.'

'I am afraid I have changed sadly for the worse, since,' laughed Grace, still busy at her work. 'What was that one, father?'

'Alfred, of course,' said the Doctor. 'Nothing would serve you but you must be called Alfred's wife; so we called you Alfred's wife; and you liked it better, I believe (odd as it seems now), than being called a Duchess, if we could have made you one.'

'Indeed?' said Grace, placidly. 'Why, don't you remember?' inquired the Doctor. 'I think I remember something of it,' she returned, 'but not much. It's so long ago.' And as she sat at work, she hummed the burden of an old song,<sup>11)</sup> which the Doctor liked. (pp. 271-272)

何という無神経。何という浅慮。一ヵ月後の今日、木曜日に Alfred は英国に帰ってくる。帰国すれば Marion との結婚が待っている。Jeddler も Grace も、この一家に関わる全ての人々が待ち望み祝福する喜びの瞬間が近づいている。にもかかわらず Marion と Grace を前にして、有ろうことか Alfred と Grace の幼年時代の情景を語り始める。読者は既に Grace を見つめる Marion の視線から、彼女と Alfred の結婚は無いと感じ始めている。それにしてもこの一場面は余りに暗示的過ぎる。何故この時こんな回想場面を持ち出して来る必要が有るのだろ

う。父親であるなら先ず Marion が、次に Grace が何を思うのか分からない筈は無い。それなのに彼は語り続ける。読者にある種の苛立ちを与えているのを承知の上で、作者は彼に語らせ続ける。としたらこの場面が与える不自然さの中に何かの意図が込められていると考えられないだろうか。多分それは Jeddler の作中での役割の一つを担っているのだろう。その役割とは父親としての Jeddler ではなく、彼自身が口にする 'farse' の中の道化的役割のように思われる。

### III

*The Battle of Life* には多くのイメージが使われている。多くの借用があるとも言えるかも知れない。それらは第一章の中に集中的に織り込まれている。先ず Dr. Jeddler の描写で、作者はこの作品が Christmas Tale であり同時に 'drama' でもあることを示し、彼と二人の娘の関わりの中に愛のテーマを描いて見せる。三人の中で、表面的には、Marion 一人が激しい感情や苦悩を、彼女の視線の中に滲ませている。Grace は完全に自分の感情をコントロールして、一見苦悩のかけらを見せてはくれない。冷静で周囲の人々を温かく包み込む安定感を持っている。彼女に対する形容詞は、'loving', 'calm', 'serene', 'cheerful' で、これが何度も繰り返されて行く。だが彼女が、'calm' であり 'cheerful' であればあるほど読者は、彼女の胸の奥深くに抑え込まれた激しい動揺、Alfred にたいする熱烈な愛情を感じ取る。ただ彼女は悟り過ぎていて、悟り過ぎていて面白くない。二人の姉妹に深く愛される Alfred が、余りにまとまり過ぎていて逆に魅力が薄れているのと同様に、Grace も重要なキャラクターである割には影が薄い。第三章で Grace 一人が事の真相を知らなかった設定の中にもそれは表われている。もちろんこの設定は意図的なもので、彼女の役割の意味を考えれば考える程読者は、彼女の中に Cricket の May の役割を見る。その視点に立てば、読者に向けられた Jeddler の予言的な言葉通り、Grace の夫となる Alfred も Cricket の Edward 的存在であると考えられ無くもない。作品で占める大きな役割。それにしては影の薄い存在。二組の男女のこの類似性が、読者の心からどうしても離れないからだ。

その様に考えて行くと、愛の一形式をテーマとしたこの作品の中で、真の主役は Marion ただ一人となる。Dr. Jeddler が語る人生観。さかんに引用される聖書のイメージ。愛する家族のもとを離れ、姿を消す決心をして涙を流す娘 Marion を見て、それは娘の読んでいる感傷的内容の小説のせいだと勘違いして、

'a real home is only four walls<sup>12)</sup> and a fictitious one,' (p. 269)

と彼女を論ずる現実的な態度。それらは全て Marion の '愛の世界' を構築するための小道具として使われている。

又弁護士 Snitchey と Craggs の存在も見過ごす事は出来ない。二人は弁護士事務所の共同経営者であるが、特に第一章第二章において、二人で一人、個々では意味を持たないキャラクターとして登場する。二人の役割は当然脇役ではあるが、例えば Alfred と比べた場合、印象度ははるかに高い。何故なら二人の登場する場面を Dickens は弁護士又は法曹界のイメージで語っているからだ。'real property', 'bequest and devise', 'mortgage and redemption', 'leasehold, freehold and copyhold estate' 等々の法律用語の乱用は、二人が実際弁護士であるから当然ではあるが、時に度を過ぎて、彼らの弁護士の発想、合理的考え方が場面全体を支配する事さえある。

だが脇役は脇役以上にはなれない。どんなに二人の強烈なイメージと理論で Dr. Jeddler や

Britain を圧倒したとしても作者の思いは別な所にある。Dickens は、それぞれ Mr. Snitchey と Mrs. Craggs を登場させ、前者は Mr. Craggs を後者は Mr. Snitchey を毛嫌いさせ、二人の弁護士を家庭の平和を乱す存在として攻撃させる。しかも作者からのたっぷりの皮肉を込めて。

場面場面で作品の底を流れ、筋の展開に強弱をつけるイメージではないが、この作品には忘れてはならない点がさらにある。第一章の Alfred の言葉の中に、

‘I believe, Mr. Snitchey,’ said Alfred, ‘there are quiet victories and struggles, great sacrifices of self, and noble acts of heroism, in it — even in many of its apparent lightness and contradictions — not the less difficult to achieve, because they have no earthly chronicle or audience — done every day in nooks and corners, and in little households, and in men’s and women’s hearts — any one of which might reconcile the sternest man to such a world, and fill him with belief and hope in it, though twofourths of its people were at war, and another fourth at law; and that’s a bold word.’ (p. 252)

と言う部分がある。人生の戦いの中で、‘他人は甘くなく、うっかりしていれば足元をすくわれ、背後から切りつけられる事もある。’という Snitchey の論に答えて語る Alfred の少し皮肉の込められた反論だが、この考え、皮肉は全て作者自身の言葉に他ならない。‘英国で人々の大半が、戦争か裁判に関わっている。’そう語る Alfred は医者を目指している。彼の婚約者 Marion の父親も医者である。今でこそ医師の職業は社会的に地位も高い。しかし Dickens の生きた時代はそれほどでもなかった事は押さえておく必要がある。Dickensian によると、‘The daily incidents of the life of a clergyman or lawyer are easily presented and generally appreciated; but the daily incidents of a doctor’s life can scarcely be detailed by any but those who have experienced them, and many of these experiences are not suited to general literature.’<sup>13)</sup>と書かれている。

聖職者、弁護士、判事に比べ、社会的な地位も低く、推理小説以外では主役として扱われていなかった医師を、又はその娘を取って主役として置き、弁護士の Snitchey や Craggs を脇役とした設定の中に Dickens 自身の皮肉な思いを感じざるを得ない。

さらに Dickens の親友で、何度も *Christmas Stories* に短編を寄稿し、その最後となった作品 *No Thoroughfare* では遂に二人だけで作品を仕上げた<sup>14)</sup> Wilkie Collins は、物語の語り手又は主役として医師を登場させている。彼は *Moonstone* や *Woman in White* といった名作を残し、推理小説の父とも呼ばれており、当然 Dickens もその作品は精読していた筈だ。としたら上記の文に見られるように、純粋な文学作品に医師が主人公として登場することはなかった時代性も考慮して、作者はこの小品を推理小説的要素のある作品として書いたのではなからうか。何のために何故 Marion は失踪したのか。これがこの作品の最大のポイントであるのを見ても、Dickens の意図はそこにあったように思われる。

#### IV

この作品を恒例の Christmas Tale たりうるものにして第一の要素は Marion と Grace の愛の形態にあるだろう。さらに Dr. Jeddler の娘達に対する愛とは何かを含める事も出来るかもしれない。しかしこのテーマは、この年の Dickens には少々手に余るものだった。自己犠牲的愛を Grace に描き込み、最後に真の自己犠牲的愛は Marion と Grace の何方により強く見いだせるかと問う展開の中に、いつもの Dickens の躍動感溢れるタッチ、途中から登場人物達が

作者の手を離れ、一人で動き始めるあのタッチが感じられないからだ。

それに対して、この作品を Christmas Tale と呼びうるものになっている別な要素が、Jeddler 家の使用人 Britain と Clemency の中に示されている。特に Clemency の 'extraordinary homeliness' は最初は皮肉っぽく、次にユーモラスに最後には真剣さと安心感、安定感の感じられるものとして描かれて行く。

読者は彼女の存在によって、愛のテーマが持つ堅苦しいぎこちない雰囲気から開放される。とは言え、彼女は単に作品に動きを与え強弱をつけるだけの滑稽な存在ではない。Clemency は本質的に、真面目で真摯なキャラクターだ。Marion が失踪する夜の彼女の必死の対応と、以後堅く口を閉ざし Marion の秘密を守り続ける態度の中には、Marion や Grace と同質の誠実さが窺える。それでいて Clemency がより魅力的な理由。その最大の理由は、彼女が Britain だけでなく読者をも包み込む、温かく揺るぎない包容力を持つ点にある。

'And duly witnessed as by law required,' said Snitchey, pushing away his plate, and taking out the papers, which his partner proceeded to spread upon the table; 'and Self and Craggs having been co-trustees with you, Doctor, in so far as the fund concerned, we shall want your two servants to attest the signatures — can you read, Mrs. Newcome?'

'I an't married, Mister,' said Clemency. 'Oh! I beg your pardon. I should think not,' chuckled Snitchey, causing his eyes over her extraordinary figure. 'You can read?' 'A little,' answered Clemency. 'The marriage service, night and morning, eh?' observed the lawyer, jocosely. 'No,' said Clemency. 'Too hard. I only reads a thimble.' 'Read a thimble!' echoed Snitchey. 'What are you talking about, young woman?' Clemency nodded. 'And a nutmeg-grater.' 'Why, this is a lunatic! a subject for Lord High Chancellor!' said Snitchey, staring at her. — 'If possessed of any property,'<sup>15)</sup> stipulated Craggs.

Grace, however, interposing, explained that each of the articles in question bore an engraved motto, and so formed the pocket library of Clemency Newcome, who was not much given to the study of books.

'Oh, that's it, is it, Miss Grace!' said Snitchey. 'Yes, yes. Ha, ha, ha! I thought our friend was an idiot. She looks uncommonly like it,' he muttered, with a supercilious glance. 'And what does the thimble say, Mrs. Newcome?' 'I an't married, Mister,' observed Clemency. 'Well, Newcome. Will that do?' said the lawyer. 'What does the thimble say, Newcome?'

How Clemency, before replying to this question, held one pocket open, and looked down into its yawning depths for the thimble which wasn't there, — and how she then held an opposite pocket open, and seeming to descry it, like a pearl of great price, at the bottom, cleared away such intervening obstacles as a handkerchief, an end of wax candle, a flushed apple, an orange, a lucky penny, a cramp bone<sup>16)</sup>, a padlock, a pair of scissors in a sheath more expressively describable as promising young shears, a handful or so of loose beads, several balls of cotton, a needle-case, a cabinet collection of curl-papers, and a biscuit, all of which articles as she entrusted individually and seperately to Britain to hold — is of no consequence. (pp. 254-255)

Clemency には字が読めない。Snitchey は明らかに彼女を軽蔑している。彼には、彼女の迷信深さやその奥にある純粹さが、全く理解出来ない。理解出来ないのは当然だ。Dickens は意



識的に、二人の住む世界の違いを対比させ描いているからだ。この場面に漂っている雰囲気。それは正にあの *Cricket* の中の Tackleton や Slowboy, 又 Tackleton と Bertha の関係に描かれていた雰囲気の再現なのだ。Tackleton の現実的で攻撃的姿勢, Slowboy や Bertha の純粹無垢な本質。すでに触れた様に *Cricket* の登場人物達が、形を変えて、時には複数の人物が一人の人物となって蘇っている。特に Slowboy は不思議な少女であった。少しも邪気の感じ取れない、自然のままの無垢な存在。人間から悪意や怒り、さらに憎悪を取り去れば出来上がる人物。それが彼女であり、そこに *Cricket* における彼女の存在理由があった。

Slowboy からこおろぎの精の魔力を取り除いたとしたら、Dickens は初めて 'ghost' や 'goblin', 'fairy' の支配しない、人間だけの活躍する Christmas Tale を構想しながら、そう考えたのではないかと思われる程の類似点がある。上記引用文の中にはそれが見事に描かれている。Slowboy は子守としては完全に失格であった。それでも彼女は子守で居つづける。Edward が変装した老紳士に出会い咄嗟に見せた悪魔払いのしぐさ。それら全ての性格が Clemency の中に引き継がれている。二人の最大の共通点は、穢れのない無垢な精神にあるが、Clemency の場合は、Britain との結婚によって、家庭を守る主婦としての安定感がさらに加味され、その意味で、'homeliness' の象徴的存在にまで昇華されている。

作品の展開から見れば、より重要な役割を担っている筈の Grace が、Marion の失踪の後 Alfred と結婚しても、彼女から家庭の匂いは伝わって来ない。Grace と Alfred の穏やかで知的で幸福な家庭には、最後まで Marion の影が大きな不安材料として覆い被さっているから当然ではあるが、作者はこの年の「家庭」の要素を意識して Clemency の中に描いている。その意味では、勿論 Britain と一体ではあるが、彼女も主役の一人と考えられ無くもない。

又彼女の存在によって醸しだされる世界は、作品中の他のどんな世界よりも魅力的で、動きを感じさせ輝いている。つまり失意の年の、又再起の年の Dickens に以前の 'らしさ' が現れている。Alfred をめぐる Marion や Grace の自己犠牲的愛、Dr. Jeddler の父親としての愛。この愛のテーマを Dickens が主に描こうとしたのは確実な事だが、それが余りに観念的に成り過ぎて読者の心に強烈な印象を与えきれていないのを考えれば、Clemency が描かれているからこの作品は救われていると言えるかもしれない。

## V

*The Battle of Life* の劇としての要素と構成、前作 *Cricket* との類似性を主に見てきたが、この作品の最も大きな特徴は、最終章が完全に逆転の発想で書かれている点にある。第一章は Alfred の外国への旅立ちを軸として展開し、第二章は 3 年後の Alfred 帰国当日の情景が描かれている。この間に Marion は姉 Grace の Alfred に対する愛の深さを確信し、自分の婚約者 Alfred の帰国当日忽然と姿を消す<sup>17)</sup>。彼女が最終的に失踪を決意する様子は、第二章の父娘の会話に示されているが、この場面から実際の失踪に至るまで、作品に、Marion を中心に緊張感が張り詰めている。この緊張感は父娘 3 人の関係に於いてだけでなく、Britain や Clemency, 又 Snitchey と Craggs をも含めた全ての人物の描写に感じ取る事が出来、それほど複雑では無いにしてもミステリーじみた筋の展開と人物描写のバランスは見事に取られている。

ところが最終章に入ると突然トーンが一変する。どこを探しても一、二章で感じられた緊張感を感じられない。Alfred の帰国と Marion の謎の失踪、あの衝撃的な出来事のあった日から 6 年が過ぎた。最終章の書き出しはそのように始まる。第二章は Alfred の旅立ちから 3 年後の出来事、それからさらに 6 年が過ぎ去った。この 6 年の間に Grace は、失意の Alfred と家

庭を持ち、平凡だが平和で穏やかな日々暮らしている。Marion は叔母 Martha のもとに身を寄せて、言わば尼のような、隠者のような日々を送っている。Dr. Jeddler は Marion の消息を知らされ、事の真相と Marion の姉にたいする深い愛を知った。Britain は Clemency と結婚した。だが Clemency は Marion の秘密を守り通した為に Jeddler 家から追放されている。さらに二人で一人であった弁護士の内 Craggs が故人となった。空白の6年間は喜びや悲しみ、希望や絶望の感情を鎮めるのに十分な長さであった。

だが Dickens はそれらの感情には全く触れず、一気に6年後の状況を提示する。読者が期待するのは、実はそれらの描写であるにもかかわらず。恐らくこの作品を読んだ後、多くの読者が感じる‘物足りなさ’の原因はその点にあるのではなかろうか。Dickens が意識してこの設定で書いたのは間違いないだろう。だが彼の意図は成功したとは言えまい。同時に書き進めていた *Dombey* により大きな注意を払い、この作品をおろそかに扱ったとまで考えれば考えすぎであろうが、それでも読者に少なくともそう思わせる隙を与えている点は否めまい。

結果が成功したかどうかは別にして、この作品のテーマは二人の姉妹の自己犠牲的愛を描くことにあった。Clemency が Snitchey に語った ‘forget and forgive’ という言葉を、第二章で Marion は同じく父と姉に語っている。この言葉こそ、逆説的に、Jeddler の哲学であった ‘人生はナンセンスの連続で、真剣に悩むに値しない。’ という考えの本質を示している。そして最終章は全てこの理念によって支配されている。Jeddler が語り続けた哲学の背後に、常に聖書の世界があり、聖書のイメージが流れていた。その行き着く先は Clemency と Marion が語った ‘forget and forgive’ の境地であった。Shakespeare が晩年に到達したと言われる境地、*Tempest* の中で Prospero が達したあの ‘許し’ の境地。作者がこの作品の結論として描こうとした世界はこの ‘許し’ の世界であった。

先に最終章は逆転の発想で貫かれていると述べたが、この ‘許し’ の下では激しい感情は起こり得ない。従って章全体のトーンが穏やかで平和なものに変わるのは当然と言えよう。ただ逆転の発想で書かれたこの和解と平安の第三章で、一人 Grace の感情だけは例外であると言えよう。作品冒頭から、最終章で Marion が姿を現し彼女に真相を語り許しを請うまで、彼女は自己犠牲的愛を貫き、自らの感情を抑えて生きて来た。そうする事で愛する妹と Alfred が幸福になれる。この悟りにも似た境地からもたらされる平安が、常に彼女の振る舞いには感じ取れた。

だが自分自身がそうしていると信じ、それが有るから平静でおれたその事実は Marion が自分に対して行っていた。恐らく Dickens が最大の見せ場として描いた姉妹の再開と和解の場面で、姉が妹の真意を理解するまで、作者がかなりのスペースを割いたその理由は、これまでとは異なった姉 Grace の抑えがたい感情を示そうとしたからであろう。残念な事に、又既に述べたように、作者は具体的にそれを示さない。平静な時も、激しく心の揺れ動く最後の場面でも、表面的には Grace は Grace のままなのだ。

逆転の発想の視点から考える時、Dr. Jeddler と彼の妹 Martha との会話の中にもそれは当てはまる。

‘This is a weary day for me,’ said good Aunt Martha, smiling through her tears, as she embraced her nieces; ‘for I lose my dear companion in making you all happy; and what can you give me, in return for my Marion?’ ‘A converted brother,’ said the Doctor.

‘That’s something, to be sure,’ retorted Aunt Martha, ‘in such a farce as —’

‘No, pray don’t,’ said the Doctor patiently. ‘Well, I won’t,’ replied Aunt Martha. ‘But I

consider myself ill used. I don't know what's to become of me without my Marion, after we have lived together half-a-dozen years.' 'You must come and live here, I suppose,' replied the Doctor. 'We shan't quarrel now, Martha.' 'Or you must get married, Aunt,' said Alfred. 'Indeed,' returned the old lady, 'I think it might be a good speculation if I were to set my cap at Michael Warden, who, I hear, is come home much the better for his absence in all respects. But as I knew him when he was a boy, and I was not a very young woman then, perhaps he mightn't respond. So I'll make up my mind to go and live with Marion, when she marries, and until then (it will not be very long, I dare say) to live alone. What do you say, Brother?'

'I've a great mind to say it's a ridiculous world altogether, and there's nothing serious in it,' observed the poor old Doctor. 'You might take twenty affidavits of it if you chose, Anthony,' said his sister; 'but nobody would believe you with such eyes as those.'

'It' a world full of hearts,' said the Doctor, hugging his younger daughter, and bending across her to hug Grace — for he couldn't separate the sisters; 'and a serious world, with all its folly — even with mine, which was enough to have swamped the whole globe; and it is a world on which the sun never rises, but it looks upon a thousand bloodless battles that are some set-off against the miseries and wickedness of Battle-Fields; and it is a world we need be careful how we libel, Heaven forgive us, for it is a world of sacred mysteries, and its Creator only knows what lies beneath the surface of His lightest image!' (p. 308)

人生を笑劇として捉え、真剣になるに値しないと考え続けて来た Dr. Jeddler は娘二人の再開と和解を見て Martha に語った言葉 'a converted brother' は彼だけでなく章そのものにも当てはまる。さらに変わった彼が最後に語る言葉こそ作品のテーマ、登場人物全員が到達する境地を明確に示している。

Dr. Jeddler が、人生を真剣に悩む価値のあるもののがんがえ始めたのは、第二章と最終章の余白とも呼べる空白の6年間のいつかで有ったのは間違いなからう。しかし彼の人生観や哲学がどのように変わっても、彼の本質はその現実的性格にある。Tackleton ほど汗水は強くないにしても、彼と May の母親 Mrs. Fielding を一人の人物にすれば Dr. Jeddler ができあがる。既に述べた Clemency と Slowboy の性格描写に同質の '匂い' が感じられるのと同様に、Dr. Jeddler と Tackleton の類似性に見られる設定の中に、もしもこの作品が、*Cricket* の延長線上にある作品だと言えらしたたら、そうなった最大の理由は、この年の特異性に求められるだろう。この年 Dickens は打ちのめされていた。疲れ切った精神と肉体で再起の願いを込め、自信を回復するための重要な意味を持つ作品ではあるが、やはり彼のイメージの泉は十分な水を湛えてはいなかったのかも知れない。

逆転の発想で書かれた最終章で、最も魅力的で成功をおさめているのは Britain と Clemency の関係に関わる部分であろう。二人の立場は一、二章とこの章では明らかに逆転している。Jeddler 家で Doctor の哲学を耳にし、Snitchey や Craggs の法律用語を散りばめた議論の場に居合わせ続けた Britain の思考回路は混乱の極みに達していた。彼はたたき込まれた多くの知識を全く整理出来なくて Clemency の夫となり、自分は何者で何を成すべきかが理解できないでいる。一方単純とよんでも良い純粹無垢な Clemency は知恵を身につけていた。家庭の切り盛り、些細な家庭内外のトラブル。それらを彼女は機敏にこなして行く。もはや Britain があって彼女があるのではなく、彼女の庇護の下に Britain は生きている。Clemency の逞しさ、

力強さは、作品の重要なテーマの一つ ‘homeliness’ を象徴するまでに昇華されている。その意味で、*Cricket* との関連で言えば、彼女には Slowboy の無垢な心に Dot の持つ主婦の逞しさを加味されている。それを Dickens は以前の Dickens らしいタッチで描ききった。本来最も重要なテーマである筈の愛のテーマは、余りに綺麗すぎて観念的に成り過ぎたため、全体的な作品の力強さは弱められてしまったが、Britain と Clemency の家庭に示されたものは、正に Christmas Tale の名に相応しい、ユーモラスで微笑ましく、少々哀しい ‘人生の戦い’ になった。

#### 注

- 1) F. G. Kitton, *Charles Dickens, His Life, Writings, and Personality* (London, n.d.), p. 144 によると、  
The proprietor of that paper, Sir John Easthope, made certain proposals to him respecting a continuance of those articles, or of a weekly letter *apropos* of his travelling experiences on the Continent — とある。
- 2) 1846年6月11日 Lausanne に着き Rosemont Villa に落ちついた Dickens は、最初 *The Battle of Life* の着想を、続いて6月28日 “Began *Dombey*” と書いた有名な手紙を友人 Forster に送っている。
- 3) *Dickensian* 2(1906), p. 209 によると、  
Here he also prepared his third Christmas Book, *The Battle of Life*, which was published the following December, and dedicated “to my English friends in Switzerland.” とあり、その友人は Mrs. Watson であった。
- 4) F. G. Kitton, *Charles Dickens, His Life, Writings, and Personality* (London, n.d.), p. 133 によると、彼は Forster にこの日、  
“We have heard THE CHIMES at midnight, Master Shallow” — “It’s a great thing to have my title,” と書き送っている。
- 5) *ibid.*, p. 150.
- 6) Dickens が Rosemont Villa で過ごした数カ月間に会った人々は Mr. and Mrs. de Cerjat, Mr. and Mrs. Watson, Mr. Haldimand, Mrs. Marcet 等の人達であったが、特に Northamptonshire の Rockingham Castle を所有していた Mr. and Mrs. Watson の話がこの作品のきっかけになった。
- 7) *The Cricket on the Hearth* の最後の場面は、  
Well! if you’ll believe me, they have not been dancing five minutes, when suddenly the Carrier flings his pipe away, takes Dot round the waist, dashes out into the the room, and starts off with her, toe and heel, quite wonderfully. Tackleton no sooner sees this, than he skims across to Mrs. Fielding, takes her round the waist, and follows suit. Old Dot no sooner sees this, than up he is, all alive, whisks of Mrs. Dot in the middle of the dance, and is the foremost there. Caleb no sooner sees this, than he clutches Tilly Slowboy by both hands and goes off at score; Miss Slowboy, firm in the belief that diving hotly in among the other couples, and effecting any number of concussions with them, is your only principle of footing it.  
Hark! how the cricket joins the music with its Chirp Chirp, Chirp; and how the kettle hums!  
\* \* \* \* \*  
But what is this! Even as I listen to them, blithely, and turn towards Dot, for one last glimpse of a little figure very pleasant to me, she and the rest have vanished into air, and I am left alone. A Cricket sings upon the Hearth; a broken child’s-toy lies upon the ground; and nothing else remains. (Oxford Illustrated Dickens (London, 1960), p. 234)
- 8) 本論で示すページは、Oxford Illustrated Dickens (London, 1960) の *Christmas Books* のそれを示す。
- 9) Dickens は、町や村をまわって歌を歌い生計をたてている minstrels を Dr. Jeddler に ‘家禽を盗む者達’ と語らせているが、これをもって彼らを蔑視していたと考えることは出来ない。何故なら彼は、大道芸人や競り売りの人々を主人公に多くの物語を書いているが、それらの中では決してそのような視点で描いてはいないから。
- 10) Dr. Jeddler が Grace と Alfred について語る時は、常に二人が婚約しているかのように語り、これが結末を暗示する効果をあげている。
- 11) 以前の *Christmas Books* 又は *Christmas Stories* であれば Dickens は、Nursery Rhymes や Children’s Verse の中から具体的に引用し、その歌を示すのだが、第一章のダンスの場面の serenade 同様、この作品では具体名を挙げていない。

*The Battle of Life*

- 12) *Cricket* の中では Tackleton が 'Bah! what's home?' 'Four walls and a ceiling!' と叫んでいる。
- 13) *Dickensian* 3(1907), p. 271.
- 14) *Christmas Stories* は、あるタイトルの下に Dickens が何編か書き、他は複数の別な作家の寄稿した作品で構成され、1850年からクリスマス特別号として発表され続けたが、後に Dickens は他の作家の作品の出来に不満を持ち、最後に Collins と二人だけで作品を書き、1867年にこの企画を中止した。
- 15) Snitchey が 'こんなおかしな女は手に負えぬ。Lord High Chancellor に裁いてもらわねば。' と叫んだのを受けて Craggs が 'この女に財産があればの話だが。' と付け加えた。このやり取りの中にも二人にする作者のアイロニーが読み取れる。
- 16) lucky penny や cramp bone (瘧疾よけのお守り) が常にポケットに入っている Clemency は Slowboy 同様迷信深く、邪気の無い無知を持っている。
- 17) Marion 失踪の場面のイラストは、有名な John Leech が描いたが、絵の内容と Dickens のストーリーが異なっており、それを知った Dickens は色を失ったが Leech の気持ちを考えてそのままにしておいた話は有名。

—平成9年10月8日 受理—